

エイズ孤児支援NGO PLAS主催

2007年春ケニア国際ワークキャンプ活動報告書

田熊佑衣

1：開催期間

2007年2月12日－2007年2月28日

2：活動地域の概要

事業地はケニアの南西部Nyanza県Siaya地区、Ukwala Division、Ukwala location、Doho EastにあるMathiwa Primary Schoolである。Town Councilの委託によるCBO (community-based organization) : KESPAの2006年の調査によると、Ukwala Locationの人口は21406人であり、そのうち60歳以上の高齢者が3161人、孤児が7035人である。(あくまでこれはエイズ孤児の数であり、子供全体に同じように言えることではないと発表。) また、エイズ感染に関しては統計が無いのが現状であるが、HIV/AIDSの蔓延が深刻な問題となっており、HIV/AIDSの正しい知識は普及しておらず、感染経路さえ知らない人が多い。そのため、エイズに対する差別やスティグマも根強く残っている。地域住民の主な収入源は農業であり、70%以上が1日1ドル以下で生活している。

3：事業の目的

ケニア共和国Nyanza県、Siaya地区Ukwalaにある公立の小学校、Mathiwa Primary Schoolにおいて、エイズ孤児を支援対象とし、学校、地域と連帯して農業を営み、そこから得た収入を子どもたちの制服代やテスト代として活用するプロジェクトである。このスタートアップをワークキャンプで行う。学校には、農業に使える水が地域から無料で供給され、農業が可能な土地を所有している。また、エイズの正しい知識の普及とエイズへの差別解消を目的としワークショップを開催する。このワークショップは学校の生徒から組織されるエイズクラブによるエイズ啓発のドラマの発表も含んでおり、エイズ啓発の発信源として今後継続的な活動を学校が行えるようプログラムを推進する。

4：プロジェクト概要

(1) 農業プロジェクト

学校、地域と連帯して農業を営み、そこから得た収入を子どもたちの制服代やテスト代と

して活用するプロジェクト。そのスタートアップをこのワークキャンプで行う。

(2) エイズ啓発ワークショッププロジェクト

Mathiwa Primary SchoolでCBO等と連携してエイズ啓発ワークショップを開催する。ワークショップでは学校のエイズ孤児らからなるエイズクラブや地域CBO(NGOのもっと小規模なもの)が啓発ドラマを発表する。また、VCTサービスを提供、感染が分かった住民に対しては治療を受けられる機関や感染者からなる自助グループの紹介を行う。

(3) 日本文化紹介プロジェクト

Mathiwa Primary SchoolのClass 5、6の授業を1コマ使い、日本文化の紹介を行う。主な内容としては習字と折り紙の紹介である。文化紹介を通して、Primaryの生徒たちや教師と交流を深めることが目的である。

(4) 運動会プロジェクト

Mathiwa Primary SchoolのClass 7、8の生徒と共に授業終了後の放課後の時間を使い、運動会を行う。スポーツを通して共に汗を流すことで、生徒たちとの交流をより深めることを目的とする。

5 : 活動報告

5. 1 全体のスケジュール

| 日付 | 朝 | 昼 | 夜 |
|-------|-------------------|--------------|--------------|
| 2月12日 | キベラスラム訪問 | オリエンテーション | フリー |
| 2月13日 | Ngong hillsへハイキング | ハイキング | ミーティング |
| 2月14日 | Ukwalaへ移動 | 移動 | 到着 |
| 2月15日 | ミーティング | ウェルカムパーティー | フリー |
| 2月16日 | 農作業 | ワークショップ準備 | ミーティング |
| 2月17日 | フリーデー(キスムへ) | フリー | ミーティング |
| 2月18日 | 教会訪問 | 家庭訪問 | Evaluation |
| 2月19日 | 農作業 | ワークショップ準備 | フリー |
| 2月20日 | 農作業 | HIVポジティブの人の話 | スポーツフェスタ準備 |
| 2月21日 | PLWHAとのミーティング | スポーツフェスタ | ミーティング |
| 2月22日 | ワークショップ準備 | フリー | 中間Evaluation |
| 2月23日 | Evaluationまとめ | 農作業 | ワークショップ準備 |
| 2月24日 | ワークショップ準備 | ワークショップ | Evaluation |
| 2月25日 | 農作業 | 家庭訪問、収入調査 | ミーティング |
| 2月26日 | 農作業 | 日本文化紹介(授業) | フェアウェル準備 |
| 2月27日 | フェアウェル準備 | フェアウェルパーティー | 最終Evaluation |
| 2月28日 | Nairobiへ移動 | 移動 | 到着 |

5. 2 農業プロジェクト

①実施目的

本プロジェクトにより栽培されたスクマウィキ、トマトを収穫し販売した収益を学校が得ることにより HIV/AIDS による孤児のための教科書や制服などの学用品を購入することを通じて、当該孤児の通学・学習を支援すること。

②活動内容

何もない状態であったグラウンドの草を刈り、耕すところからはじめ、最終日には野菜の芽が出たことを確認できるところまで進めることができた。

5. 3 エイズ啓発ワークショッププロジェクト

①活動目的

- ・ HIV/AIDS に関する正しい知識の伝達をワークショップという媒体を通して広く行う。
- ・ VCT サービスの無料提供による検査の奨励と実施。
- ・ Ukwala の地域における、HIV/AIDS によってもたらされるスティグマの解消。
- ・ VCT により HIV 感染を知った人へのサポートの紹介。

②活動内容

(1) ドラマ準備

- ・ 侍劇

担当者がキャンプ前より台本の作成を行い、それを実際に Ukwala に入ってから、他の参加者との話し合いや演技の練習をしていく過程で改訂しながら、作り上げていった。ワークショップ本番を迎えるまでに計 5、6 回程の練習時間を設けて行った。

- ・ エイズクラブとのエイズ啓発劇

エイズクラブの子供たちによるルオ語の劇を英語に翻訳して台本を作成。

練習時間は基本的には放課後の時間（15 時過ぎから）に限られており、合同練習の機会は少ないように思えたが、ボランティアが自主的に練習時間を作り、セリフを覚えるなどの準備を行った。

(2) 日本料理提供の準備

提供する料理に関しては、日本で行った事前研修の段階で担当者、メニュー共に決まっており、現地調達が多量な調味料や食材の準備に関しては、参加者で分担し、円滑に準備が行えたように思う。しかしながら、実際に料理の準備を始めたのはワークショップ当日

であり、午前中の時間がない中で、必要な野菜などの食材の購入を行ったため、結果的にワークショップの開始時間を遅らせてしまうという結果になってしまった。前日に仕込み可能な準備をするべきだったとの反省が残る。

5. 4 日本文化紹介プロジェクト

①活動目的

小学校の生徒、教師ら関係者との交流。書道や折り紙などの日本伝統文化の紹介。

②活動内容

小学校から授業1コマもらい、class5とclass6にわかれて日本の伝統文化である折り紙と書道を生徒、教師に現地ボランティアスタッフに体験してもらった。最初にクラスを5グループにわけて各グループに日本人ボランティアを一人置き、一人が黒板の前で全体の指示をするという形でスタートした。まず書道で「平和」という字を書いてもらった。筆や半紙、墨など見たことのない道具に囲まれて好奇心旺盛な子供たちはわくわくして自分が書く順番になるのを待っていたが、筆が1教室に5~6本ほどしかなく全員が書き終わるのに時間がかかった。待っている間に多くの子供たちが墨で彼らの名前を腕に書いて欲しいと日本人ボランティアにせがんで收拾がつかなくなりそうになる場面もあったが、子供たちの中には後日、日本語で自分の名前の書かれた腕を自慢げに見せびらかす子もいた。

折り紙は2枚の折り紙を左右対称に折っていき組み合わせる、「手裏剣」に挑戦してもらったが、個別に説明をしなくてもできる子もいれば、手取り足取り一緒に折っていかなければできない子もいた。わからないところは日本人スタッフが一人ひとり丁寧に教えてなんとか教師も含めて全員無事に時間内に作る終えることができた。

5. 5 運動会 (Sports Festival) 企画

①活動目的

学校の生徒達や教師との交流を深める。

②活動内容

学校内のグラウンドで、男子と女子に別れて行われた。

男子はサッカーを行った。初めに運動会担当者から簡単な説明を行い、4つのグループに生徒と日本人を分け、トーナメント方式での試合を行った。

女子はドッジボールを行った。初めに日本人によるドッジボールのデモンストレーションによるルール説明後、実際にゲームを行った。

分の殻に閉じこもってしまっている。

HIV/AIDS：1999年に夫を亡くした。周りからの支援を何一つ受けておらず、夫が生きていればミシンの仕事をして回りからも支援をもらい、息子を Secondary school に行かせることが出来るのに…と口にしていた。しかし最後に私たちに向けて「夫をエイズで失ってから、この家には誰も訪ねてきません。みなさんの様な方が今日訪問してきてくれて本当に嬉しい、少しスティグマが減った気がします。」と言い、少し笑顔を見せてくれた。

その他：毎日の楽しみと幸せがあるかという質問に対して、母親は「自分は息子を Secondary school に通わせてあげられないので楽しみも夢も無い」と答えた。

ケース③

家庭状況：祖母(80歳)と義理の娘、孫の7人家族。一緒に暮らしている義理の娘は、2人の息子のうちの生きている一人の妻。

生活状況：義理の娘が農業を行い、わずかなお金を稼いでいるが、エイズの薬を飲んでいて、長い間きつい仕事は出来ないため、思うように働けないという。

教育：金銭的な問題から子どもを Secondary school に通わせることもできない。祖母に夢をきいたところ、子どもを Secondary school に通わせることと、自分が病院に行きたいと言っていた。

HIV/AIDS：祖母は1985年に夫を亡くし、息子夫婦は2001年、2004年に死亡。生きている息子は祖母と妻を残し、失踪し、妻だけが残された。娘は HIV positive であり、薬はもらっているが、2時間かけて取りに行かなければならない。又、薬以前に毎日の食事が不十分で栄養不足である。祖母も病気を抱えているが、お金がなく病院には行けない。周りからの支援は一切なく、誰一人として訪問してくれないので、私たちの訪問を非常に喜んでいた。

ケース④

家庭状況：祖母(80歳)と孫6人の7人家族。孫のうち4人は片親を無くし、2人は両親をなくしている。

生活状況：食事は1日1~2回、ウガリや野菜、芋やオートミール。祖母は年齢的に働けない状態のため、親戚や友人からわずかに支援をもらっている。一番大変なことを尋ねると、やはり子どもの教育、そして十分にご飯を与えられないことだと答えた。現在もらっている親戚からの支援もいつ途絶えるかわからず、これからの生活に関して不安を抱いている。

教育：孫のうちの1人は Secondary school に通っている。制服代などは支援をもらっていない。

HIV/AIDS：この家は町を中心からかなり距離のあるところにあり、祖母は町まで歩くことが出来ないため、エイズに関する十分な情報を得られず、又孫を VCT に連れて行くことができないという。

5. 6 ホームビジットプログラム（エイズ孤児宅訪問）

①活動目的

エイズ孤児を抱える家庭を実際に訪問し、支援先の孤児たちが実際にどのような生活をしているのか、学校の中だけのコミュニケーションだけでは触れることのできないエイズ孤児の生活状況や彼らが抱える問題について調査する。また調査によって得られた情報を日本で広く知らせることによって、届きにくい当事者の声を社会へ発信する。

②活動内容

第1回目は各グループ3つの家庭を訪問した(①～③)。2回目は2つの家庭を訪問した(④～⑤) 一家庭およそ30分をめぐりに質問形式で行った。質問事項は家庭状況、生活状況、教育について、またHIV/AIDSに関しては親の死亡年やスティグマについて、感染者の場合は薬へのアクセス等である。さらにグループの興味に応じて自由に質問をした。

ケース①

家庭状況：母(58才)と実子と孫の10人家族

生活状況：野菜を売ってわずかな収入を得ている。食事は1日1～2回。オートミールのみの場合もある。

教育：金銭的な問題から子どもをSecondary schoolに通わせることができない。母親は、Secondary schoolを卒業しなければ職に就くことが難しいことを認識しており、教育の重要性を訴えていた。

HIV/AIDS：2005年に夫をエイズで亡くした。そのため周りの人は彼女の家を避けるようになり、近所の人はもちろん、親戚までもが手助けを拒み、彼女一人で全て行っている。又、ヘルスセンターでVCTを受けたところ、positiveではないということだった。

その他：最後に夢を聞いたところ、その場にいた2人の孫は1人が銀行員、もう一人は教育を続けてSecondary schoolに通い、法律家になることと答えた。母は全ての子供に教育を受けさせ、将来いい仕事に就くことで、自分の子どもがさらに他の孤児を助けることと答えた。

ケース②

家庭状況：母(31歳)と実子6人の7人家族

生活状況：食事は1日1～2回野菜とウガリのみ。

教育：長男は今年Primary schoolを卒業する予定で、成績優秀なためSecondary schoolへの推薦を貰っている。しかし金銭的な問題からSecondary schoolの学費はどうも賄うことができない。長男自身も友人はSecondary schoolに進学するのに自分だけ行けないがために自

その他：祖母に夢を聞いたところ、制服を買い与えること、十分な栄養、そして全ての子どもが Secondary school に進み教育を受け、将来仕事に就き、自分の孫がさらに助けを必要としている孤児を助けることだと答えた。キリスト教を深く信仰しており、神を通して生きる喜び、幸せを得ているという。

ケース⑤

家庭状況：孤児だけで生活。16歳、15歳、14歳の孤児3人だけで生活している。

本来は5人兄弟だが、2人の姉はすでに結婚して家を出ている。

生活状況：孤児たちが生活している家は元々家族で生活していた家である。近所に大人がいるがそれぞれ別の孤児を抱えているため、支援をもらえない。親戚の支援は学費のみで、毎日の生活の支援は一切もらっていないため学校が休みの日に農業を手伝ってわずかな収入を得ている。家事を全て自分たちの手で行っているため、勉強をする時間が無いという。又、親戚の支援もいつまで続くかわからない。

教育：長男は親戚の支援を得て Secondary school に通っており、三男は Primary school、次男は家庭の仕事が忙しく勉強をする時間が無いため先生から留年を宣告されたが、そのままドロップアウトしてしまった。

HIV/AIDS：父は2006年、母は1994年に無くなった、原因は断定は出来ないがおそらくエイズだという。忙しくVCTを受ける時間がない。学校、DDYG(現地CBO)のエイズ啓発ドラマでエイズの知識を得ており、彼自身もドラマに参加することで同じ境遇の子どもと経験を共有し、それが彼にとって一番の楽しみだという。Secondary school にはお金持ちも多く、見た目の違いから悪口を言われることがあるがいじめはないという。
親戚と一緒に暮らさないのか？と尋ねたところ、ドラマを通し、エイズ孤児として親戚に引きとられたときの怖さ(実子との差別など)を知っているため、自分たちだけで生活していると答えた。

その他：夢を尋ねたところ、医者になりマラリアやエイズなど地域の病気に苦しむ人を助けたいと答えた。夢のために勉強がしたいのに、お金も勉強をする時間もないという。同じ境遇の子どもと経験を共有する機会がもっと欲しいと言っていた。